

信頼できるボダボダ運転手を確保することは、移動の自由度を高めるうえで重要である。

そして、2017年9月にふたたびウガンダに渡航したとき、SafeBoda 以外に、カンパラには新たに2社が進出しており、合計3社によってボダボダのライドシェアをめぐる競争が激しくなっていた。カンパラの幹線道路では、ライドシェア企業のジャケットを着た運転手が何人も走っている。しかし、現状はまだ、カンパラ市内であっても、時間帯や場所によっては、アプリで周辺を探してもボダボダが見つからないこともあり、このサービスは発展途上だといえる。

今、ウガンダにおけるスマートフォンの普及率は20%ほどであり、日本やアメリカの約70%と比べると大きく下回っている。しかし、近い将来、ウガンダにおけるスマートフォン普及率はさらに上昇するだろうと推測される。そうなれば、多くの人が、スマートフォンのアプリを利用してボダボダを呼ぶようになるだろう。このとき、人やモノの流動性はさらに高くなり、ボダボダ間のサービスや価格の競争も激化する可能性がある。スマートフォンやITがどんな未来をつくっていくのだろうか、カンパラの雑踏のなかで、さまざまな想像がふくらんでいく。

介助現場のフィールドワークからみる 脳性麻痺児を対象とした排泄介助の工夫

善 積 実 希 *

「排泄」の語りにくさ

わたしたちが生活をしていくうえで、排尿や排便といった排泄行為は身体健康のバロメータである。しかしながら、日常生活では「排泄」という言葉を口にすることすら少なく、その語りにくさがあるようにもおもわれる。介助の現場では排泄という言葉を用いることや、排泄について考えることは、日常的であり、介助を受ける人の健康について考

えるうえでとても重要なことである。たとえば、障害児の自立を考えたとき、排泄に関していえば排泄自立がある。彼らにとって排泄自立は、彼らが排泄できるようになるだけではなく、大きな自信をもって自由に行動することを可能にし、発達の可能性を引き出すといわれており〔桑野 1988: 107〕、排泄について考えることが欠かせない。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

身体の生理現象について考える日々

わたしのフィールドワークはこうした人の生理現象について考えることから成り立っている。わたしはケニア共和国のサンプル県 (Samburu County) にある障害をもつ子どもを支援する施設で、ボランティア (介助者) として子どもの介助に携わりながら、介助現場で繰り広げられるケアの様相について観察を続けてきた。当施設では年齢¹⁾や性別、障害の種類や程度もさまざまな障害者が寝食を共にしている。そのため、子どもたちが必要とする介助の内容や程度は一樣ではなく、彼らのうち排泄介助を必要としていたのは脳性麻痺児であった。

脳性麻痺児の身体の特徴として、不随意運動や筋肉の硬直、言語表出の困難さなどがあり、排泄に問題を抱える脳性麻痺児は多いといわれている [山川ほか 1993: 815]。介助者の体力的な負担もひとつの課題として挙げられ、たとえば、ザンビア共和国でおこなわれた調査では、上記した脳性麻痺児の身体の特徴のために、おもに介助を担っている母親が介助に伴う身体的な苦痛を経験する傾向にあると報告されている [Singogo *et al.* 2015]。また、介助者には物理的な困難により体力的な負担がかかるばかりではなく、脳性麻痺児にとって言語表出が難しい場合があることから、介助者が子どもの便意のサイン

を把握できないという問題もある [山川ほか 1993: 816]。脳性麻痺児に対する排泄介助に着目した研究は、介助者の負担や脳性麻痺児の生活におけるストレスの軽減のための方策を考える一助になるとおもわれることから、わたしは脳性麻痺児への排泄介助に着目し、介助者の視点から介助するうえでの困難について考察するために、フィールドワークを実施してきた。

スタッフが危機感をもっていた脳性麻痺児に対する不安定な排泄介助状態

わたしが 2018 年に当施設でフィールドワークを実施したのは、調査対象地域において降雨が断続的に長く続く雨季であった。そのため、朝に洗濯して日中のあいだ干しておいた衣類が夕方になっても乾かないことがしばしばで、子どもたちが着替えを必要とするときに乾いた衣類がないことが何度もあった。当時、施設にはおむつの在庫がなく、おむつを必要とする脳性麻痺児²⁾もおむつではなく布製の下着を身に付けていた。そのため、彼らが排泄を終えるたびに下着の着替えが必要であったことから、彼らが着替えをおこなう頻度は他の子どもたちと比べてとても多かった。こうした状況下で介助をおこなっていたスタッフたちも、脳性麻痺児が必要とする着替えをできず、望ましい介助ができていない

1) 当施設では障害をもつ子どもを支援の対象としているが、成人の障害者も生活している。彼らは幼少期から施設で支援を受けており、専門学校や大学に通いながら施設で生活する者や仕事をしながら施設で生活する者がいる。

2) 調査当時、当施設では 82 人の子どもが生活していたが、おむつを必要としていたのは脳性麻痺児 (10 人) のみであった。

状態に危機感をもっていた。このような不安定な排泄介助状態が続いていたある日、脳性麻痺児の介助を担当しているスタッフのメアリー³⁾がポータブルトイレの製作をはじめた。

ひらめきからはじまった排泄介助の工夫 —ポータブルトイレを自分で作る

① その場にあるものを活用する

当施設は国内と国外から個人や団体を問わず支援を受けており、机やいす、リハビリ用品などの物品が寄付されている。幼児用のプラスチック製のポータブルトイレ（おまる）（写真1）もあり、自ら姿勢を維持できる子どもに対してはこれらを使用して排泄介助がおこなわれることもあった。しかし、姿勢維持に手助けを必要とする脳性麻痺児のためのポータブルトイレはなく、幼児用のポータブルトイレを用いて彼らの排泄介助をすることはできなかった。そこでメアリーは、施設にもともとあった木製のいす（写真2）を改良して脳性麻痺児のポータブルトイレを製作す



写真1 幼児用のポータブルトイレ



写真2 木製のいすと机

るという案を思いついた。

当時、施設の一部が工事中であったために施設には複数の大工が出入りしていた。メアリーはいすを改良してポータブルトイレを製作するアイディアをもっていたが、そのための技術はなく、道具も持ち合わせていなかった。そこで、たまたま施設に仕事をしに来ていた大工に頼みこんでいすに穴を開けてもらうことにした。メアリーとその大工は顔見知りということもあり、この仕事は無償だった。そして、彼女は施設に隣接する国際NGOの事務所から使用済みペットボトルを無償で譲り受け、排泄物を受けるための容器⁴⁾を作成した（写真3）。

② 子どもの反応をみながらポータブルトイレを改良する

メアリーは新しく作ったポータブルトイレを使って脳性麻痺児の排泄介助をし、子ども

3) 本稿で扱う人物名はすべて仮名である。

4) 20 Lの飲料水が入っていたプラスチック容器の上部を切り落とし、下部のみを木製のいすの穴の下に置くことで、排泄物を受ける仕組みとなっている。



写真3 ポータブルトイレに改良された木製のいすと排泄物を受けるための容器

たちの反応をみながらそれらを改良していった。この背景には、日ごろの脳性麻痺児の排泄介助で、メアリーが脳性麻痺児の反応を観察していたことが重要な点として挙げられる。彼女は、介助に関する知識や技術習得の講習を受けたことはない。けれども、日ごろの脳性麻痺児への介助実践から個々の子どもの特徴や反応をよく理解し、新しいポータブルトイレを使ったことに対する子どもたちの反応をしっかりと把握していたのである。たとえば、パトリック（男性、年齢不詳）は新しいポータブルトイレの使用中に「泣く」「顔をしかめる」という反応をみせ、姿勢を保てず前後左右に倒れてしまっていた。また、メアリーがアニー（女性、年齢不詳）の清拭をしているときに彼女の臀部に新しいポータブルトイレの座面と擦れてできたとおもわれる傷を見つけた。

メアリーはこうした子どもたちの反応や体の状態をみて、パトリックのように新しい

ポータブルトイレに座った際に姿勢を維持することができない子どものために、施設の各部屋から集めてきたクッションを使って彼らの体を支える工夫をした。そして、アニーのようにポータブルトイレの部位が体に擦れて傷ができてしまっていた子どものために、施設にあった防水シートを新しいポータブルトイレの座面に貼り付けるという案を思いついた。彼女は施設で生活しているジェイソン（男性、20代、車椅子を使用する）に防水シートの貼り付け作業を頼んだ。彼はビーズの装飾品を作成して販売するほど器用で裁縫道具も保有していた。シートを貼り付けるための材料と道具が必要だと気づいた彼は、その場に居合わせたウィリアム（男性、20代、聴覚障害）に施設内の工事中の部屋からねじと金づちを探してくるよう頼み、2人で貼り付け作業に取り掛かった。彼らのこうした取り組みを経て、防水シートが貼り付けられたポータブルトイレが完成した。



写真4 防水シートが貼り付けられたポータブルトイレ

フィールドワークから学ぶ介助をめぐる人びとの営み—施設の環境を活用した介助の工夫

メアリーは、施設におむつの在庫がなく、雨季で洗濯物が乾かないために排泄介助に苦労している状態は、持続可能な介助ではないとの危機感をもっていた。そこで彼女は、当時の施設の環境を利用して脳性麻痺児の排泄介助を改善することに努めた。まず、大工が施設で作業をしていたということから、無料でイスを修理することと大工道具の調達を可能とした。そして、施設には多様な背景をもつ障害者が共同生活していることから、メアリーが施設で生活する成人の障害者に作業を委託することで、ポータブルトイレの改良を実現した。

このように、ポータブルトイレを製作し、脳性麻痺児の反応を観察しながら改良していった一連の流れは、メアリーによる日頃の脳性麻痺児に対する介助経験からうまれた介

助の工夫である。これは、メアリーが介助を受ける脳性麻痺児の反応をよくとらえ、それに即して努力した結果で、両者の協働関係によってできた介助の改善の実践である。本稿で示したような介助の工夫の事例は、フィールドワークからこそ学ぶことができる介助に関わる人びとの営みであるといえる。

引用文献

- 桑野タイ子. 1988. 「障害児のトイレット・トレーニング」丸川和子編『看護 MOOK 28—排泄と看護』107-113.
- Singogo, C., M. Mweshi and A. Rhoda. 2015. Challenges Experienced by Mothers Caring for Children with Cerebral Palsy in Zambia, *The South African Journal of Physiotherapy* 71(1): 274.
- 山川友康・新井睦美・馬場先俊仁・森 知子. 1993. 「脳性麻痺児の排便指導」『理学療法ジャーナル』27(12): 815-821.

イノシシが未来の森をたべる

—防火のための植林活動を事例として—

亀岡大真*

私は2018年5月から約1年間インドネシア共和国リアウ州の村に滞在し、火災の研究を行ってきた。主には火災や土地利用の衛

星解析、村や行政での聞き取り調査を通じて火災に関わる人間活動や自然環境要因を明らかにしようと取り組んでいる。その一方で、

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科